

VI 傾向、傾向予測、占い

Stuart A. Sutton

Sutton, Stuart A.

Trends, Trend Projections, and Crystal Ball Gazing

Journal of Education for Library and Information Science. Vol.42, No.3, 2001,
p.242-247.

KALIPER 研究によって図書館情報学 (LIS) 専門家の職業教育における6つの一般の傾向が確認された。本稿ではそのような変化を、Nancy Van House と Stuart Sutton が「パンダ症候群：LIS 教育の生態学」¹⁾ で提示した枠組に照らして検討する。

1993 年か 1994 年初めから約 1 年間にわたって、当時様々の問題を抱えていたカリフォルニア大学バークレー校の図書館情報学部長代行であった Nancy Van House と形式ばらない対話を行ったことは大きな喜びであった。筆者は当時州立サンノゼ大学図書館情報学部(バークレーとはサンフランシスコ湾を挟んで対岸にある)の理事長であり、LIS 教育の将来について悩みを抱えていた。対話はそれぞれのオフィスでもバークレーの喫茶店でも繰り返され、二人は LIS に起こっていることをできるだけ客観的に把握しようと試みた。当時はコロンビア大学の LIS 学部が閉鎖されて間もなく、バークレーの LIS も母体大学自体から圧迫されていた。我々が JELIS に発表した論文「パンダ症候群：LIS 教育の生態学」(The Panda Syndrome: An Ecology of LIS Education) の一部はこの対話から派生したものである²⁾。

この論文で我々は種々の生態学的・社会学的理論のレンズを通してモデルを形成しようと努めたのだが、例示した大学の多くで見られた出来事が我々の考察に反映している。またそれらの教育機関が、変革と現状維持の硬化したバランスの中で身動きが取れない状況にあったことも当然考察に影響した。現状維持が快適かつ安全であるかに見えるような場所や状況があるにしても、停滞が長引けば最終的には組織が適応不全に陥ることを我々は論文の中で示唆しておいた。

同論文ではまた図書館情報学の数十年にわたる変化についても述べた。この変化をシラキュース大学の Robert Taylor は「図書館を中心とする天動說的宇宙から、情報を中心とし、図書館が重要ではあるが必ずしも中心的ではない役割を担う地動說的宇宙への転換」³⁾ であると述べている。このような変化の一般的な特徴や、その変化が不可避

なものであることは、Fritz Machlup の 1960 年代初めの著書「米国における知識の生産と流通」(Production and Distribution of Knowledge in the United States)⁴⁾ から十分に予測できたものである。この問題は 1970 年代初めに Daniel Bell の「脱工業社会の到来」(The Coming of Post-Industrial Society)でも取り上げられ、その後は多くの人が論じるところとなった⁵⁾。これら未来学者の著作は時として悪評を被っているけれども、その予測は(Taylor のものも含めて)大よそのところでは今日実現しつつあり、しかもそのペースは時とともに速くなっている⁶⁾。

我々が議論を戦わせていた 1990 年代初めには、インターネットはまだ大学の研究者の専有物であった。Tim Berners-Lee が Web を発明したのは 1991 年であるが、Marc Andriessen がブラウザを開発(1993 年)してはじめてブレイクし、先進国では「情報化時代」が万人の実感となるに至った。情報の宇宙の天動説から地動説への転換は四半世紀かけてゆっくり進んだが、Web の普及は情報を一気に舞台の中心に押し出したのである。

以下では、KALIPER 研究で見出され Karen Pettigrew と Joan Durrance が The Bowker Annual で述べている傾向について、「パンダ症候群」で示した変化のモデル⁷⁾に照らして簡単に論じたいと思う。KALIPER 研究によって見出された 6 つの傾向は 2 つに分けられる。すなわち (1) 伝統的な LIS の範囲内での自然な発展を反映しているだけと思われるもの(傾向 3 と 5)、(2) 従来の枠組を崩すような全体的な変化を反映しているもの(傾向 1, 2, 4, 6)である。

個々の傾向を論ずる前に、KALIPER 研究の所見はその方法論からして暫定的なものと考えざるを得ないことを指摘しておきたい。これらの傾向やその種々の原因の中には比較的明瞭なものもあるが、観察される様々の変化の間のつながりや因果関係を知るには、より注意深く設計された研究方法が必要である。そうしたわけで LIS における変化の存在やその動態には光が当てられたものの、LIS の現在の位置や LIS が向かおうとしている地点は推測の域を出ず、いわば依然として占いのような状態にとどまっている。特に、LIS が一方向にのみ変化しているのか、あるいは？「パンダ症候群」で用いた生態学的メタファーを借りれば？種々の LIS 関係機関が情報の地動説的宇宙の中で新たな職能の線引きを求めて種形成・放散・収斂を繰り返すことによって、様々な方向への進出を試みているのかは不明確である。この宇宙の姿が明らかになるにつれて、一つの情報職業を考えることが誤りであること、様々な方向への進出が種形成を促し、多様な職種が「情報問題」⁸⁾の種々の側面に取り組んでいることが見えてくるかも知れない。

KALIPER の見出した傾向

1998 年から 2000 年にかけて行われた KALIPER 研究では、26 の LIS 教育プログラムに関する事例研究によって、6 つの一般的傾向が抽出されている。事例研究から引き出された傾向の陳述を別の 7 つの LIS 機関に示し、これらが最初の 26 のプログラム以外の機関の経験にも当てはまるかどうかを検証した⁹⁾。以下の議論では The Bowker Annual に掲載された Pettigrew & Durrance の記述に従って傾向を要約し、「パンダ症候群」の枠組¹⁰⁾によって評価する。場合によっては調査結果から得られた結論に疑義を呈することもある。

KALIPER 研究で見出された 6 つの一般的傾向は次のとおりである。

- 傾向 1 : LIS カリキュラムは、制度としての図書館や図書館固有の業務に加えて、広範囲の情報環境や情報問題を取り上げるようになった。
- 傾向 2 : LIS カリキュラムは引き続き他分野の観点を取り込もうとしている一方で、利用者中心の新しい中核部分が固まりつつある。
- 傾向 3 : LIS 学科およびそのプログラムは、情報技術をますます多くカリキュラムに投入し浸透させている。
- 傾向 4 : LIS 学科およびそのプログラムは、カリキュラム内での専門分化の構造を模索している。
- 傾向 5 : LIS 学科は授業形態を多様化し、学生により大きな柔軟性を提供している。
- 傾向 6 : LIS 学科およびそのプログラムはカリキュラムを拡張しつつあり、学士・修士・博士の各レベルで関連した学位を用意している。

これら 6 つの傾向は、伝統的な LIS の範囲内での自然な発展を反映しているだけと思われるもの（傾向 3 と 5）と、従来の枠組を崩すような全体的な変化を反映しているもの（傾向 1 , 2 , 4 , 6）に分けられる。以下では第 1 の類については簡単に触れるにとどめ、第 2 の類を主に論ずる。

伝統的分野での進展 : 傾向 3 および 5

傾向 3 と 5 は共に、LIS 学科での教育内容および教授方法へのコンピュータおよび通信技術の浸透の程度に関わっている。これらは必ずしも職業実践の方法の本質的变化や職能の境界の移動を反映するものではない。オンラインデータベース、オンライン検索、MARC レコード、書誌ユーティリティ、OPAC などが登場して以来、LIS 教育機関でも情報専門家の職場でもコンピュータ・通信技術への注目が徐々に高まり、それに投入される資源も増加してきた。これらの技術は、特に図書館業務を変革する可能性は

持っているが、さしあたりは主として従来の仕事をよりよく進めるために利用され、変革のため(すなわち新しい仕事をするため)には用いられてこなかった。このように新技術が日常の職務遂行の中に入り込んできた以上、これを教育に取り入れなければ伝統的な支持母体である職業のニーズから遠ざかることになってしまうであろう。

同様に、技術を介させた授業(遠隔授業であれ対面授業であれ)は、LISに限らずすべての分野の教育訓練に変化をもたらしている。授業形態の多様化(特に遠隔授業)が後述する一層重要な変化を促進することも十分考えられる。たとえば過去においてはLIS学科は地元の学生と地元の施設(第一義的には図書館)に支えられる形で地域的に限定された存在であったため、地域にニーズがあり資源が許す限りなるべく広い範囲をカバーする包括的機関となっていたが、授業形態の変化に伴って「すべての人にすべてを与える」必要性は薄れ、特定の分野における「センター・オブ・エクセレンス」としての役割を果たすようになる可能性がある。つまり遠隔授業が原因となって、専門化という形で種形成が促進されるわけである。しかし授業方法が多様化しても教授内容そのものには直接の影響はなく、この傾向が職能の基本的な構造を変えるとは考えられない。

コペルニクス的転回 :傾向 1, 2, 4, 6

傾向 1, 2, 4, 6 への適応的応答は、成功すれば LIS 専門職業の認知範囲(cognitive jurisdiction)を拡大するという意味で変容的なものである。「パンダ症候群」の生態学的メタファーを用いれば、これらの傾向は「新しい生態的地位への適応的放散」(新しい情報機能)(傾向 1)、種形成(卒業生やプログラムの分化)(傾向 4, 6)、交雑(学際性)(傾向 2)」を表している¹¹⁾。傾向 2 は複雑な問題を含むので後述するが、これを除けばすべて、トップクラスの LIS 学科が概念的にも実践的にも従来考えられなかった新しい領域へ進出する(放散、交雑)動きを表すものであり、場合によってはプログラムで定義される種々の職業的役割の間に明確な境界線が見られることもある(種形成)。

これらが 4 つの異なった傾向なのか、単一の傾向の 4 つの側面ないし尺度にすぎないのかはなお不明確であるが、筆者は後述するように、Taylor のいう天動説から地動説への転換の観点から、一つの統一的な説明が可能であると考えている。

傾向 1 は上述のように、「パンダ症候群」の表現をもってすれば適応的放散の過程であるが、同時に Taylor のいうコペルニクス的転回の中核をも示している。この傾向の核心は Jeffrey Katzer が 10 年前に次のように述べていたものである。

「社会のすべてのレベルで、政策担当者も一般人も同じく、情報化社会に生きていることを一層意識するようになってきている。多くの人には次のようなことが明らかである。

- あらゆる組織で情報管理の必要性が急速に増している。
- 図書館は情報産業の一部にすぎず、しかも多くの部門では最重要の部分ではない。
- 情報関連の職業人の間で図書館員はますます少数派となっている(・・・)」¹²⁾

このように、LIS 学科の卒業生は次第に新しい情報関係職業へと放散しつつある。Pettigrew & Durrance は調査対象機関の多くが中核的カリキュラムを拡張し「情報環境の広がりを際立たせている」¹³⁾ ことに注目しているが、その結論として「図書館スキルが本質的に異なった環境や他の情報問題への移植性を持つ」としている点には疑問がある¹⁴⁾。Andrew Abbot は「職業のシステム：専門職業の分業についての試論」(The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor) で、ある職業が新しい問題領域で認知範囲を拡大しようとするための論法として「還元」(reduction) と「抽象」(abstraction) を挙げている¹⁵⁾。「還元とは、新しい問題を既にある職業の範囲内にあった問題に還元できることを示すことである。(・・・) 抽象とは、ある職業の基礎にある抽象的知識が新しい領域でも適用できることを示す、より強力な論法である」¹⁶⁾。抽象がより強力な論法だというのは、最終的にはその職業の理論的基礎(それはまた認知の基盤でもある)に立脚しているからである。これに対して還元の論法は職業に関わる一群のスキルに基づいているにすぎない。

「パンダ症候群」で我々は Abbott の 2 つの論法に加えて第 3 のものとして「新知識」を挙げ、生態学的概念である交雑により、あるいは学際性として定義した。我々の考えるところでは、新しい、または拡張された領域のニーズに対して特定の職業の知識ベースでは不十分な場合もあり、したがって観点や研究方法や知識ベースの異なる他分野との提携が必要になる。この第 2 群の諸傾向に見られるものの大部分は新知識の必要性を示すものである。ここでも Katzer は「情報管理の問題は一層学際的になっており、かつては分野の中心から外れたものと思われていた領域の知識や技能が必要とされている」¹⁷⁾ と述べ、交雑の起こる文脈を示している。我々は「パンダ症候群」の中で、「交雑の方法には学際的な教授陣、兼任教員、共同研究、共同学位、科目の相互乗り入れなどがある」ことを述べた¹⁸⁾。

傾向 2 には、関連はあるが独立の 2 つの傾向、すなわち (1) 上述の学際性への傾向、(2) 利用者指向の強化の傾向が複合されている。両者は論理的に関係があるとはいえ、2 つを一緒にしてしまうと、単独に取り上げた場合に比べて重要性を過小評価する結果になる。この傾向の第 2 の側面、すなわちプログラムの利用者指向的性格の強化は、コ

ペルニクスの転回に巻き込まれた分野での自然な発展と見てよいであろう。この分野は当初は制度としての図書館、職業としての司書を中心としていた。コペルニクスの転回の最初の兆候が現れたとき、「情報」の語が多くの学位の名称に取り入れられた（学科名が一斉に変わることはなかったが）。情報が宇宙の中心を占めるようになると、人間生活における情報の役割をめぐって多くの重要な問題が提起された。

LIS の伝統的な関心事は情報ではなく、むしろ情報を含む媒体、すなわち図書、雑誌、地図、画像等々であり、それらの収集、記述、保存、流通を行なうにしても、その内容がどのように利用されるかには注意を向けてこなかった。John Perry Barlow は ASIS の 1994 年度年央大会の基調講演で、情報を高級ワインに喩えてこう言っている。「我々は長年ワイン事業をやっているつもりでいた。しかし実際にはワイン事業ではなくボトリング事業をやっていただけだ。そして我々は実はワインについては何も知らないのだ」¹⁹⁾。

したがって傾向 2 のこの第 2 の側面は「ワイン」について、そしてもちろんそれを飲む人について知ることに関係している。

傾向 4 および 6 は適応的放散と種形成の異なる側面を示しているように思われる。すなわち、卒業生の分化と、明確に区別された学位プログラムによって彼らが占めるべき新しい生態的地位である。生態学の理論では「種形成においては元の種が 2 つ以上の新しい種に分かれ、それぞれが異なった生態的地位に適応する」²⁰⁾。傾向 6 は、多くの LIS 学科が大学院レベルの複数の学位のほか学部レベルでも学位を提供していることに示されている。しかしコペルニクスの転回に対する LIS 学科の適応的応答は単なる種形成よりも更に複雑であり、学際性などの交雑の機構による後生的または水平的進化も働いており、それに種形成が伴っていることが多い。このような適応的行動のパターンは、過去数十年の間にシラキューズ大学、ドレクセル大学、ピッツバーグ大学などの LIS 学科に例証されている。

しかしながら、学部・修士・博士の各レベルでの学位授与によって傾向 6 を示している LIS 学科も、必ずしもすべてが同時に大学院課程での種形成を行っているわけではない。そのような教育機関の応答は、既存の修士号の範囲を拡張して領域の拡大に対応することであった。明瞭な種形成を行っている機関に比べて、このようなプログラムがアイデンティティ喪失の危険を冒すものであるかどうかは興味ある問題である。またそれらの機関が傾向 4（専門分化の促進、特定領域に合わせたプログラムの改変）を追求することで、種形成の効果（明確に分化した製品）を達成し得るかどうかに関心を持たれる問題である²¹⁾。

進化的収斂の問題

我々は「パンダ症候群」において「LIS は、従来自らの領分であった情報の問題領域でも、技術と社会の変化によって出現した新しい情報機能においても、他の職業や専門分野との競合に面している」²²⁾と想定し、また領域をめぐる競争は進化的収斂(起源を異にする種が対決と相互浸透を通じて収斂すること)の形をとりやすいものと仮定した。KALIPER 研究はこのような競合については触れておらず、学際的傾向は明記しているが、ビジネススクール・コンピュータ科学・通信などの学科や職業が狙っている領域で LIS が直面している縄張り争いについての考察はない。

結論

この小論において筆者は、KALIPER 研究で見出された LIS 教育の6つの傾向を「パンダ症候群」で提示した変化の枠組によって検討した。傾向のうち4つは LIS の領域での全体的な変化を表しており、いずれも Robert Taylor の「コペルニクスの転回」、すなわち図書館を中心とする天動說的宇宙から情報を中心とする地動說的宇宙への転換のメタファーで説明することができる。

米国の LIS 教育のコペルニクスの転回には1つの中心点があり、一時はそれに1つのニッチが伴っていた。中心点はシラキューズ大学、時点は1974年である。読者の多くがご承知であろうが、当時は Robert Taylor が学部長を務めていた。1974年に図書館学科が情報学科に改称され、多くの LIS 教育機関が根本的な変化とその影響とを相手に苦闘している現在、シラキューズ大学情報学科は「元祖情報学科」として創立27周年を迎えている。

文献および注

1. Nancy van House and Stuart A. Sutton, "The Panda Syndrome: An Ecology of LIS Education," *Journal of Education for Library and Information Science* 37, no.2(1996): 131-47.
2. Ibid
3. Ibid
4. Fritz Machlup, *The Production and Distribution of Knowledge in the United States* (Princeton, N.J.: Princeton Univ. Pr., 1962)
5. Daniel Bell, *The Coming of Post-Industrial Society* (New York: Basic Books, 1973).
6. たとえば Micael H. Harris, Stan A. Hannah, Pamela C. Harris, *Into the Future:*

The Foundations of Library and Information Services in the Post-Industrial Era, 2nd ed. (Greenwich, Conn.: Ablex, 1998) における Bell の扱いを参照。

7. Karen E. Pettigrew and Joan C. Durrance, "KALIPER Study Identifies Trends in Library and Information Science Education," in *The Bowker Annual*, 45th ed., eds. Dave Bogart and Julia C. Blixrud (New Province, N.J.; Bowker, 2000).
8. 「情報問題」は「パンダ症候群」の中で次のように定義されている。「LIS の領域は情報問題である。すなわち一つには、自らの置かれた状況を理解したいという人間の衝動であり、人はそのために情報を利用する。また同時に、情報ニーズを持つ個人と情報の蓄積ないし外部記憶 ? 特に人間の技術的努力により何らかの記録として蓄積されたもの ? との間を (人間的あるいはその他の方法で) 仲介することである。この問題は、認知的ニーズを満たすために情報を求める利用者と、そのニーズに応える解決策を含んでいる可能性のある巨大な情報蓄積との間に起こる出来事の経験的な知識に基礎を持っている」(132)
9. Karen E. Pettigrew and Joan C. Durrance, "KALIPER Study Identifies Trends in Library and Information Science Education."
10. 傾向の順序は *The Bowker Annual* に列挙されている順序ではなく、ここで述べようとする陳述や分析の流れに合うように変更した。
11. "The panda Syndrome," 144.
12. Jeffrey Katzer, "Developing and Maintaining Interdisciplinary Relationships," in *Information Science: The Interdisciplinary Context*, J. M. Pemberton and A. E. Prentice, eds. (New York: Neal-Schuman, 1990),84-89.
13. "KALIPER Study Identifies Trends," 211
14. Ibid
15. Andrew D. Abbott, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor* (Chicago: Univ. of Chicago Pr., 1988)
16. "Panda Syndrome," 138-139.
17. "Developing and Maintaining Interdisciplinary Relationships," 84-89.
18. "Panda Syndrome," 143
19. Ibid.; John Perry Barlow, "Themes for the 21st Century: Where Are We Going?" (speech presented at the mid-year meeting of the American Society for Information Science, Portland, Ore., May 1994)
20. Ibid.
21. ただし専門化がこれ以上に進む傾向が実際に存在するかどうかは、研究の結果から

は明らかでない。

22. "Panda Syndrome," 131.

著者紹介

Stuart A. Sutton: ワシントン大学(シアトル)情報学部准教授